りびんぐらいぶず　令和四年七月第一号

救いの御名のほとけさま

◆ご讃題

汝一心正念にして直ちに来たれ、
我よく汝を護らん

（Ref　散善義』七祖注釈版 p467）

◆はじめに

今から九年前、私と坊守は初めてブラジルの地に降り立ちました。

百年前に移民された日本人の二～五世の皆様が営まれる「南米仏教婦人大会」を支援するためだったのです。

ところが、千人規模の大会と聞いて失敗は許されません。思い余って梯　實圓和上をお訊ねしました。今お話するとすればこんなお話になりそうですがと

和上はにこにこしながら「お念仏は難しいものじゃない。これでいい、行ってらっしゃい」とおっしゃいました。

現地の総長は「是非来て下さい」とおっしゃいました。

「行け」というお声と**「来たれ」**というお声に安心して私は現地に渡りました。

忘れ得ない二河白道のエピソードでした。

※私達は、苦悩の有情であります。聖人は

如来の作願をたづぬれば
苦悩の有情をすてずして
回向を首としたまひて
大悲心をば成就せり（正像末和讃第三十八首）

とお謳いになりました。

如来様の仰せの通りにお念仏すれば聞こえて下さる南無阿弥陀佛こそは、**「汝一心正念にして直ちに来たれ、我よく汝を護らん」**との阿弥陀様のお喚び声でした。

釈尊は**「すでにこの道あり、きみただ決定してこの道を尋ねて行け」**とおっしゃったのです。**来たれ**と**行け**によって、衆生は二河白道を勇気付けられて歩めるのでした。

大会では、皆様よくご存じの東日本復興支援歌『花は咲く』を現地の御門徒さん達と一緒に歌いました。

まっしろな雪道に　春風香る
わたしは懐かしい　あの街を想い出す
叶えたい夢もあった　変りたい自分もいた
いまはただ懐かしい　あの人を想い出す
誰かの歌が聞こえる　誰かが励ましてる
誰かの笑顔が見える　悲しみの向う側に
花は花は花は咲く　いつか生まれる君に
花は花は花は咲く　私は何を残しただろう

これは、悲しみにうちひしがれた衆生が誰かの笑顔をこの目で見（見遇）、誰かの歌をこの耳で聞いて（聞遇）、励まされ立ち上がりやがていつか生まれる君に何を残しただろうと自らに問いかける歌だと窺われます。

それがそうと分かるのは、衆生が立ち上がり、まだ見ぬ君がこの世に生を受け、物思う年齢に達したときですね。するとこの歌は支えられた衆生が次代に伝えるお念仏の姿だとみることができそうです。

この歌の中に**「聞こえる」**という言葉がでて来ますね。お喚び声が「聞こえる」、「聞こえて下さる」とは、浄土真宗で**「聞名」**と云われるとても大切なお言葉でしたよね。

只今の私の悲しみの向こう側に誰かが私を励ましている。その歌声で私は蘇ったのです。有難いですね。私はひとりで不安がることはなかったからです。

誰かの歌が聞こえる　誰かが励ましてる

「誰か」とは誰か。それまで私は知らなかったのですが、これこそ南無阿弥陀仏の仏さまだったのではないでしょうか。

日本に伝った大乗仏教が花開いたのは、法然上人によってお念仏一つでお浄土に往生できるみ教えが誕生したときでした。

親鸞聖人は、その本質は、本願力で回向された行信一つだとおっしゃったのです。

南無阿弥陀仏の**「南無」とは「帰命」、「帰せよの命」、「私の願いを聞いておくれ」**と阿弥陀様が本願のお心から切なる願いで喚び続けていて下さるお喚び声だったのです。

◆阿弥陀様の切なる願い

聞で顕した信とはどのような物柄か、嘗て殿試の口頭試問で承った問でありました。これは全く親鸞聖人の独創です。疑蓋無雑という限り信は疑わないという姿（相）に留まりますが、聞と捉えれば、聞こえて下さるお名号の働きで捉えたことになります。

信心は「疑わない」というネガティブ表現の儘ではお救いに与るPhase変換の一瞬ですからただ一度であり、信心獲得に至るプロセスが見えませんが、聞くことと云えば、如来に喚び覚まされる三昧に繋がります。

お念仏を仰せの通りに称えれば、勅命となって聞こえて下さる“お名号”に喚び覚まされるのです。

◆一蓮院秀存師と六連島のお軽さん

◆お東の香月院深励師のお弟子一蓮院秀存（1788～1860）師は、

◆「声しあらば　あやふからじな　火に水の　なかのほそみち　見ゆも見えずも」

とお歌いになりました。

「中の細道」とは、如来様のお喚び声に喚び覚まされつつ歩む二河白道でしたよね。

信心は唯一度（信一念義）と承って参りましたが、「聞」といえば、喚び続けていて下さる（喚ばふ）阿弥陀様のお喚び声に喚び覚まされる三昧に繋がります。

親鸞聖人がなぜ**「聞即信」（一念多念文意第二条）**と仰せ下さったかの訳はここにあるのではなかったでしょうか。

◆妙好人の六連島のお軽さんは、

◆「昨日聞くのも　今日又聞くも　是非にこいとの　お喚び声」

とお歌いになりました。有難いですね。

さすがに一蓮院秀存師は学僧として、浄土真宗の「信一念義」のご法義に煩悶して、

◆「勅命は　ただ一声と思ひしに　今日もくる日も弥陀のよび声」

とお歌いになりました。

「今日も来る日も」の(三昧)がいいですね。

◆大厳和上(1791～1856)の大悲招喚の詩

一蓮院秀存師と同じ頃、長門の国、江崎の教専寺の第十代大厳和上がいつもお念仏を大きなお声でお称えなさるので称名正因ではないかと疑いを掛けられ、御本山から原口針一和上が調査に赴かれました。三業惑乱直後の出来事ですからさもありなんと推察されます。

そのとき大厳和上が自らの心情をうたわれたのが大悲招喚の詩と伝えられます。原口和上は大厳和上の心に感じ入り、これこそ浄土真宗本来の姿と貴ばれ、のちに自ら

われ称え　われ聞くなれど　南無阿弥陀
つれてゆくぞの　親の呼び声

とお詠みになったほどであります。

もう極仏恩報謝情（もう極の仏恩　報謝の情）
清晨幽夜唯称名（しょうしんゆうやただ称名）
堪歓吾唱雖吾聞（歓ぶに耐えたり吾称え聞くと雖も）
此是大悲招喚声（これはこれ大悲招喚の声）合掌

◆令和四年七月三日十九時半　正覚寺仏壮お聴聞の会
◆令和四年六月十六日（木）十九時半　正覚寺仏婦例会
著作編集兼発行元(本願寺派　正覚寺内)
〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166・FAX077-596-0196 住職堅田　玄宥